

第44回人権・同和問題啓発講演会
(平成29年2月21日午後2時30分～4時)

<第一部>

演題：リオ・パラリンピアンから見た共生社会実現への課題

講師：鈴木 徹 氏（陸上競技、リオ2016大会まで5大会連続入賞）

<第二部>

演題：パラリンピアンから見た職場や社会のあり方

講師：須藤 正和 氏（セーリング、過去パラリンピック3大会出場）

目 次

<第一部>	1 頁
演題：リオ・パラリンピアンから見た共生社会実現への課題	
講師：鈴木 徹 氏（陸上競技、リオ 2016 大会まで 5 大会連続入賞）	
<第二部>	9 頁
演題：パラリンピアンから見た職場や社会のあり方	
講師：須藤 正和 氏（セーリング、過去パラリンピック 3 大会出場）	
1. 自己紹介	9 頁
2. パラ・ワールド・セーリングでの役割	9 頁
3. インフラのバリアフリーに関わる法整備	10 頁
4. 合理的配慮	10 頁
5. インフラのバリアフリーについて	10 頁
6. 見た目－メラビアンの法則	13 頁
7. 必要な配慮	13 頁
質疑応答	17 頁

＜第一部＞

演題：リオ・パラリンピアンから見た共生社会実現への課題

講師：鈴木 徹 氏（陸上競技、リオ 2016 大会まで 5 大会連続入賞）

SMB C 日興証券所属の、義足で高跳びをしております鈴木徹と申します。

私は、今、右足に義足を着けている。講演では、アスリートとして、これまで気づいた点を皆様にお伝えしたい。

まず初めに、私の 10 分間のプロフィール映像をご覧いただきたい。私は元々ハンドボールを学生時代にやっていたが、事故により足を失い、その後、陸上を始めてパラリンピックの世界に入った。

（ビデオ放映中）

これは北京 2008 大会までの映像だが、その後ロンドン 2012 大会、リオ 2016 大会にも出場した。

私は 18 歳、高校 3 年生のときに足を失って、健常者から障がい者の世界に入った。足を失い義足を着けたが、病院に入院したときはまだ足の治療が終わっていないので、足を切りっぱなしの状態です。車いすや松葉杖を使って病院の中で生活することになった。当時、自分としては、足がなくなっても自分の気持ちがしっかりしていれば、外に出ても問題ないという気持ちでいた。しかし、いざ病室の外に出る許可が出て外出したときに、まず売店に車いすで行くと、病院にいる人に足を見られてしまうわけである。病院服を着て、車いすに乗っていると、小学生の小さい男の子に「あの人、足がない」と大きな声で言われた。そこにはその子のお母さんがいて、私はそのお母さんに何か私について「ケガをしてしまった」とか「事故をしてしまった」とその子に伝えてもらいたかった。しかし、実際にそのお母さんがしたことは、その子を私から反対方向に向かわせることであった。私のことを「見てはいけない」という素振りを目の前でされたわけである。その後も、たくさんの方が病院にいますので、常にこそこそ言われたり、いろいろなところで指を差されたりといったことをたくさん現場で経験してきた。私はまだ心が強くなかったため、外に出たくないという気持ちが強くなり、病室に引きこもるようになった。足を見られるのが嫌だったので、必ず外に出るときは、足の上に毛布をかけ、車いすの足掛けに靴を置いて、右足はないが足があるように見せて移動していた。移動する時間帯も、病院が閉まっている週末に行くとか、夜の時間に外に出ることしかできなかった。もちろん家族や友達、先生方が守ってくれるのだが、最後に自分で行動を起こすときには、そのような準備をしない

と出て行けないということ強く感じていた。

その後、義足を着けて生活をするわけだが、義足を着けたてのころは、階段や坂道がつかなくて、エスカレーターやエレベーターを使っていた。今では普通に生活をしており、階段や坂でも、エスカレーターがあれば、エレベーターを使わなくても生活ができるぐらいまで回復した。

海外に行くと驚くことがある。皆さんは障がい者が日本にいる場合と海外にいる場合では、どちらが過ごしやすいと思われるだろうか。

おそらくハード面に関しては、日本のほうが整っている。ヨーロッパに行くと、石畳の道や古い建築物が多いので、車いすや義足もガタガタ言いながら生活しなければならない。日本は、バリアフリーが整っており、何不自由なく生活することができている。

5月と9月に、ブラジルにリオ2016大会の関係で行った。9月は治安が悪く外に出ることがあまりできなかったが、5月はビーチに行った。現地は暑いのでズボンではなくハーフパンツや短パンを穿いて、義足をむき出しにしてビーチに行った。すると、必ず声を掛けてくれたのである。「足、どうしたの」「何しているの」と聞かれ、「スポーツをやっている」と答えると、「何のスポーツをやっているの」と、我々に興味を持ってくれる。それは日本ではまず起こらないことである。日本人はある意味優しいし、誠実に接してくれるが、気を遣われる。何かお話をしたいが、気を遣うところがあり、そこには距離感がある。

日本と海外の違いの大きな面は、目線である。日本人が義足を見るとき目線と、海外の人の目線は違う。日本人は「何かしてあげたい」という気持ちがあるのもわかるのだが、「ああ、義足だ」と、少し冷たい目で見られることがある。子供だと「気持ち悪い」とか、「ロボットみたい」といまだに言われることもある。小学生は見たままを伝えるので、それが素直な感想だということが分かる。しかし私が小学生に講演をしたときは、初めはそのような感想を持つが、1時間ぐらい講演して、「では、もしみんなが自分の足がなくて、そういうことを言われたらどう？」と私が聞くと、「僕はいやだ」と答え、1時間後には私と子供たちの中には、障がいとか健常とかは関係なくなっている。そこには本当にバリアがフリーになっている状態が形成されるわけである。

海外では、車いすや義足の人が多く歩いている。空港でも、税関を通る際に、私は税関で申告することはないのだが、たまに呼ばれると、一切税関のことは聞かれずに、「職業は？」「スポーツ選手です」「何のスポーツだ？」「陸上をやっています」という具合で、私の映像を見せると、「こいつスポーツ選手だってよ」と横の人にも映像を見せて、それで「GO」となる。それしかししないのである。これぐらいの違いが日本と海外ではある。日本では、なるべく僕らを外に見せないように見せないようにする。それはすごくありがたいのだが、逆にそれが、僕らが生活しにくくしてしまっている部分でもあるのではないかと

と私自身感じている。

それはもちろん仕方ない部分でもある。私が学生時代のころは障がい者と接する機会がほとんどなかった。今、学校では「特別支援学級」があるので、子供たちは普通に日常生活を通して知的障がい者や身体障がい者の人と接する機会がたくさんある。私の子供は今、長男が小学校4年生、次男が小学校1年生だが、保育園生のころには、保育園の近くに聾学校があったので、聾学校の生徒と交流することで障がいを理解していった。「聾学校の生徒は耳が聞こえないから、呼ぶときは肩をトントンと叩けば振り向いてくれる」と私に教えてくれたりもした。ただ私達が学生の時代のころは、特に私のいた県は、支援学校は県の端に追いやられていて中心地にはなかった。障がい者と交流できないようにするためなのかどうかはわからないが、中心地ではない外にあるので、普段接することがほとんどなかった。たまに神社や公園に行くと、知的障がい者の子が遊んでいるが、普段交流していないので、汚い水を飲んで、そこでおしっこをしていると、「ちょっと汚いな」「ちょっと嫌だな」という思いがずっとあった。正直、自分が健常者のころは、障がい者を見下していた部分があったと思う。それぐらい障がいについてはわからず、生活をしていた。しかし、自分自身が障がい者になって思うことは、私自身もそうだが、障がいや病気は自分でなろうと思ってなったわけではなく、結果的にそうなった人ばかりだということである。私自身も、居眠りしようと思って事故をして足を失ったわけでもない。知的障がい者の人でも、先天性の方は、それを持って生まれてきてしまったのである。そこを突ついても、答えは見つからない。

私が皆さんにお願いしたいことは、やはり障がいや病気を見るのではなく、その人自身を見てもらいたいということである。私の場合は義足を使っているのですが、それほど皆さんにご迷惑をお掛けすることはないと思うのだが、知的障がいの人だと何か行動を起こしてしまったり、皆さんに意地悪をしてしまったりすることもある。それはその人本人がしたいわけではなく、その病気がそうさせているということを理解していただきたいと思っている。

私の友達で、パラリンピックに出た同級生が熊本にいる。その子は生まれてすぐおじいさんに芝刈り機で腕をもっていかれてしまい、腕がない障がいになった。パラリンピックにも出場し、その後、熊本の県庁に勤め、仕事もちゃんとしているのだが、その友達の結婚式に招待されて熊本に行ったときには、お嫁さんのご家族は一人も来ていなかった。おかしいなと結婚式が終わった後に聞いてみたら、結婚式の前にご両親のところにご挨拶に行ったとき、入口に入った瞬間にお父さんに「うち障がい者はダメだから」と言われたそうである。それはすごく残念なことで、その人は普通に役所で働いているし、パラリンピックにも出場しており、ちゃんとした人なのである。障がいがあるということ、腕がない

ということだけで、そういう言葉を浴びせられる現状があるということを知ってもらいたい。

私自身も結婚するときに、やはり相手のお母さんに、「障がいがあると苦労する」とか「大変」とか、特に田舎だと世間体がどうしても付きまってしまうので、そういう意味で反対されたこともあった。今、私は結婚してから 10 年、熊本の友人も結婚してから 5 年ぐらい経ってどうなったかという、逆に相手の考え方が変わってくれたのである。「うちは障がい者はダメだ」と言ったお父さんは、今は考え方が反対に変わって、「そのときは自分が小さい人間で悪かった」と言ってくださっている。それは、彼の義理のお父さんやお母さんが、嫌な人なのではなく、ただ知らないだけなのだと思う。健常者が障がい者のことを知らないことで、僕らがすごく嫌な思いをすることはこれまでたくさんあった。

これからは、ダイバーシティということ、いろいろな人がいろいろな場所にいる。外国籍の人も、我々が子供のころは「外人、外人」といじめられたこともあったが、今では陸上界はハーフの選手がたくさん活躍している。今の子供たちは、外国籍の子がいることで、その子たちと交流して、いろいろな文化などを学んでいく。外国籍の子は決していじめられる対象ではなくなっている。

私自身思うのが、やはり子供ではなくて、大人だということである。大人はこれまでの教育や普段の生活で、障がい者に関わってこなかったと思う。うちの親もそうだが、やはり私が障がいになったときに、まずどうしていいかわからなかった。今後大変な思いをするのはわかっているが、義足も見たことがなく、障がいの世界はどういうものか知らないということがまず前提としてあった。私自身もわからないので、本当に困っていた。今では色々な情報がテレビや新聞に出ている。パラスポーツもそうだが、まず障がいについて、少しでも興味を持っていただきたいというのが、一番の皆さんにお伝えするメッセージとしてある。知らないとどうしても解消できない部分が多い。

視覚障がい者や知的障がい者といった人と交流することで、その人の情報を得られると思う。視覚障がい者だったら、ちょっと私が前に行って、右手で左肩をトンと乗せれば安全に進める。その人にとって手を乗せる肩が右か左かという好き嫌いもあるので、その好悪の違いぐらいをつかんでいけば、全盲の人は、普通に生活ができると思う。車いすの人では、重度の人だとエレベーターも使えるし、我々アスリートの仲間は力があるので、エスカレーターをドーンと右手で持って、登っていく人もいるといった違いもある。

いろいろな障がいがある中で、これまでは日本ではおそらく障がいというと知的障がい者の人をメインに捉えてきたことが多かったと思う。今はいろいろな障がい者が我々を含め、周りにたくさんいる。職場に障がい者がいるという人もいらっしやると思う。なるべく、障がいを持った人が「どこができなくて、どこができて、できないところはちょっと

こうすればできるのではないか」ということを、少しでも考える時間を増やしていただきたい。私自身、今日も車を運転してきたが、足がない右足でアクセルとブレーキを踏む。足首では操作できないので、ハンドルをいっぱい上げて、ひざを上下させると、普通に操作できる。福祉車両に乗れば、アクセルを左に持って行くこともできるのだが、やはりそうするとほかの車に乗れなくなるので、私としては皆さんと同じように運転したいと思い、そういうかたちで工夫をしており、そうするとやはり人間の能力がそこに追いついてくる。そうすることで、普通に生活ができるようになってきている。

実際、日本の場合、ハード面はすごく整っている。小池都知事とアスリート委員会で対談をさせてもらった際に、パラアスリートは私1人で後はオリンピックが4人いたが、私に話を振られたときに、小池都知事は「障がい者が使える施設を増やしたい」とおっしゃっていた。私は、もちろん施設を増やす事は大事だと思うが、施設は日本中に十分あると思う。ただ、障がい者が使える施設がないのである。例えば車いすバスケットをやろうとすると、傷がつくからと断られる。陸上競技場に行くと、義足の選手である私は良いのだが、車いすの選手は自転車扱いされるので、「地面がへこむ」という理由で断られる。ジムへ行っても同じである。視覚障がい者の人がランニングマシンを使おうとすると、「危ないからダメ」と断られる。その「危ない」が何をもちいて危ないのかをはっきり説明してくれないのである。「障がい＝危ない」と見ていると思うのだが、それは全然違うと思う。私もそうだが、一般の人も、使い方を間違えれば誰だって危ない。それなのに、「障がいがあるから危ない」「傷をつけるからダメ」というふうに言われてしまうことがすごく多い。

しかし、海外はそういうことがない。障がいを持っている人が普通に施設を使っても、断られることはまずない。日本でも断られない県が一つある。それは沖縄県である。沖縄県は、おそらくアメリカの文化も入っているからだと思うが、陸上競技場に行くと、障害者手帳があると無料になり、何をしても怒られることはない。車いすバスケットの人もそうだが、車いすレーサーの人が使っても、普通のことと見ているので、怒られることは一切ない。東京オリ・パラもあるので、そういうところを、沖縄だけではなく、日本全国に伝えていただきたいというふうに小池都知事にはお伝えをさせていただいた。

施設を作ることはお金もかかるし、大変なことだと思うので、元々ある施設をいかに使えるようにしていくか、健常者だけではなく障がい者の人も使えるようにすることがすごく大事かということをお話させていただきたくて、そういうことをお伝えした。

実際、日本の場合、ハードの面が、整いすぎているというふうに私自身は感じている。整いすぎているので、我々障がい者が自立しすぎてしまって、皆さんと交流する機会が減ってしまったと思う。

私がアテネ 2004 パラリンピックに行ったときの話だが、試合が終わった後、近くのカ

フェでお茶をしていたときに、一人の女性の人が車いすで来た。その人は地下のレストランに行きたいのだが、エレベーターが付いていなかった。どういうふうにしたかという、一般の男の人が二人来て、その女の人を地下に運んでいった。ご飯を食べて 30~40 分して上にあがってきたときは、今度は店員さんが 3 人で運んできた。これが日本で起こるかという、私はたぶん、まず起きないと思う。エレベーターもちろんあるし、皆さんは忙しく活動しているので運ぶ余裕もないと思うので、そういうことが起きないと思うのである。ハードが整いすぎたことでそういうことが起きないと思う。しかし、海外では、不便だからこそ、みんな「何かあったら助けよう」という気持ちが、たぶんいつでもあると思う。もちろん日本の人もあるとは思いますが、ほとんど手を貸さなくていい場面が多くあるので、なかなか距離感がつかめず、「してもらいたいけどできない」とか、「してもらいたくないけどやってしまう」といった距離感がどうしても生まれていると思う。そこは障がいについて知っていただくとともに、我々障がい者と交流していただくことがすごく大事かと思っている。

私の場合は、本当に皆さんに手伝っていただくことはなくて、自分自身で運転できるし、生活もできる。たまに傷ができて皆さんの手をお借りすることもあるが、ほとんど年間を通して、皆様に手伝っていただくことはない。ただ、これから、東京オリ・パラを含め、日本ではいろいろな状況が変わっていく中で、障がい者が生活をしていくうえで、ハードだけではなく、心の部分をもっと充実させていくことが大事かと思う。私が選手としてできることは、皆さんの目に触れることが一番だと思っている、競技活動で活躍することもそうだが、テレビやメディアを通して、「義足はこういうもので、こういうことができて、こういうことができなくて」ということをお伝えすることが私の役目だと思っている。皆さんの会社にも障がいを持たれた人がおられるかもしれない。そういう人を通して、会社の中でその方の情報共有をしてもらうことで、ほかの社員の教育もできる。それにより興味を持っていただき、理解が横に広がっていくと思う。今後はそういうかたちをちょっとずつでもいいので取り入れてほしい。

日本人は、ただ知らないだけだと思う。心はすごく温かいものを持っているのに、知らないことで、なかなか関わろうとしても関われない人が多いと思う。まずは知っていただくために、どんどん積極的に我々と交流してもらいたい。私自身に関しては、普通に義足のことについて聞いていただいても構わない。事故の原因についても、聞いてもらえれば、普通に答える。皆さんとそういうかたちで交流したいと思っている。

日本は、ハードは整っているのだが、現実問題として、使いにくい施設もある。実際にあった施設の話をしたい。ある建物に広いトイレがあったが、開けた瞬間に車いすが入れないトイレであった。また、バリアフリーを謳った施設にはスロープがあるが、スロープ

がずっとあって、いいかたちで下ってきたのだが、最後の最後で階段が2段あるといった施設もあった。東京のある公園では、点字ブロックを敷いているが、四角の公園なので、四角く点字ブロックを敷いているが、出口の点字を敷いておらず、視覚障がい者の人が入ったら一向に出られない、という状況があった。これは笑い話だが、本当に現実起きていることである。健常者の人が必要だろうと思って多くの施設を用意したおかげで、逆に障がい者が迷ってしまうということが結構ある。

私達はもちろん視覚の情報があるが、視覚障がい者の人は、本当に電車の距離感や危険性がわからない。一般の人は電車とホームのスペースをまたげるのだが、ブラインドの人はそこまで歩幅を広げられないので、線路に落ちてしまって、事故となるケースも結構ある。そういうところは、やはり障がい者の人がどういうところが不便で、どういうところが困っているかということをお伝えしながら、また共有してもらおうことも、今後は必要なのではないかと思っている。

今後は、東京大会に向かって、いろいろな海外の人が日本に来られると思う。パラリンピックに関しては、オリンピックの後に開催される。パラリンピックは、障がい者の世界大会になるわけだが、暗黙のルールがある。視覚障がい者の選手の競技では、わーっと騒いではいけない。おとなしくして、拍手もできない。ただし、例えば高跳びの場合は飛んだあとに拍手をすることはいい。陸上競技の場合は、競技中に表彰式がある。表彰式の間は、必ず立ち上がって脱帽して、国旗の掲揚を見ながらそっちのほうに向かなければいけない。そこでずっと座っていると、「日本人はこんなことも知らないのか」と思われてしまう。これからは、スポーツを観るときの観戦マナーも伝えていきたいと思う。

最後になるが、義足について説明したい（以下、鈴木氏が実際に使用している義足を見せながらご説明）。これは、私が使っている競技用の義足である。1本80万円ぐらいする。フルカーボンファイバーである。網目になっている黒い部分がすべてカーボンとなっており、チタンとか、軽くて強い素材を使っている。これがどれぐらい弾むかということ、これぐらい弾むのである。強くすればするほど弾むのだが、ただこれをお見せすると、義足を着ければ早く走れ、高く飛べると思われがちだが、実はすごく難しい。こう離すとバランスが悪いのである。弾む部分に落とさないで、ちゃんと弾んでこない。例えばちょっと後ろに落とすと断然反発が変わってくる。なので、あくまでも道具であり、野球で言うと、ここが芯の部分になるので、つま先の部分に常に落とすということがすごく大事になってくる。つま先の部分は、私の足の一番遠くにあるので、見えないところでそこに落とすという作業がすごく大事である。私自身、100メートル12秒2が現在のタイムだが、高校3年生のときは11秒3で走っていたので、1秒ぐらい、まだ遅いのである。ということは、義足が、そこまでまだ有利ではないということはお分かりいただけると思う。もちろ

ん義足でオリンピックのメダリストに近い記録を持っている人もいますが、ほんの一部である。これからは義足の進化もしていくと思うが、やはり義足を使うのは我々人間である。我々人間の進化が義足と合ってこない、なかなか記録が出ないということを、皆さんにわかっていただきたい。今後東京大会に向けて、実は残念な問題がある。私が今使っている義足はすべて海外の製品である。日本のメーカーの義足もあるのだが、まだまだ海外よりは少し遅れている。いろいろな企業が試行錯誤して作っているので、いつかメイド・イン・ジャパンの義足を着けて選手として活動していきたいと思っている。

今後ともパラスポーツに少しでも興味を持っていただきたい。東京大会で私は 40 歳になるが、まだメダルが取れていないので、そこでメダルを取るために、これからまた一年一年頑張ってもらいたい。今後は是非生で競技を見に来ていただければと思う。

<第二部>

演題：パラリンピアンから見た職場や社会のあり方

講師：須藤 正和 氏（セーリング、過去パラリンピック3大会出場）

SMB C日興証券の人事部ダイバーシティ推進室の須藤と申します。

1. 自己紹介

最初に私の自己紹介をしたい。私は1957年に台湾の台北で生まれた。生後10ヶ月で、脊髄性小児麻痺、今でいうポリオに罹った。今の若い人はほとんど「ポリオ」と言ってもわからないだろう。赤ちゃんのときにたぶんポリオワクチンを皆さん打たれていると思う。今ではワクチンがあるので、ワクチンを打てば、ほとんどの人はポリオになることはない。しかし、当時は世界中でポリオが流行っていた。その後、12歳のころに私は一人で日本に来た。ヨットとのかかわりは、1992年2月に新聞を見て、ヨットの講習会があるということで、参加してからである。そして、海の世界、波と風の世界に感動し、そのまま競技の世界に入った。そして1996年のアトランタ、2000年のシドニー、そして2004年のアテネのパラリンピックに参加した。2年前の2015年にSMBC日興証券に障がい者アスリートの雇用で入社した。現在、当社には10名の障がい者アスリートがおり、私だけフルタイムでダイバーシティ推進室に勤務しているが、残りの9名は競技に打ち込んで、講演活動なども行っている。

1992年から25年間、ほとんど毎年、2回か3回海外のレースに出場して、2006年から3年間は常に3ヶ月ほどオーストラリアのキャンベラに住んでいた。この25年間、私にとってはとても素晴らしい日々だった。多くの人と知り合うことができ、私の財産でもある。25年間、いっぱい楽しんだ分、今、少しずつお返しをしているところである。

2. パラ・ワールド・セーリングでの役割

2年前に東京オリンピック・パラリンピックが決まったときに、残念ながらセーリングがパラスポーツから落とされた。健常者のヨットの団体も危機感を感じ、2年前に障がい者の団体と健常者の団体が合併し、「World Sailing（ワールドセーリング）」という組織ができ、その下に、「Para World Sailing Committee（パラワールドセーリングコミッティー）、世界障害者セーリングコミッティー」という障がい者が運営するコミッティーができた。世界から10名の理事がいるが、私はその一人として今活動している。

私の主な仕事は、世界障害者セーリングコミッティーの運営をしていくのが一つである。もう一つ大きな使命は、2024年のパラリンピックに、ヨット競技が再びパラスポーツとし

て戻れるようにすることで、そのために普及活動を主に行なっている。まだヨットを競技として行っていない国を招待して、クリニックをするといった活動を行っている。

3. インフラのバリアフリーに関わる法整備

日本ではバリアフリーのインフラの整備に関していろいろな法律がある。1994年のハードビル法、2000年の交通バリアフリー法、そして2006年のバリアフリー新法という、三つのバリアフリーに関する法律がある。現在は、バリアフリーが大変進んでおり、特に公共機関や公共の建物においては、ほとんどバリアフリーの工事が進められている。一部の古い路線などはいまだに工事をしているが、多くの場所では私のような車いすの人が動きやすい環境になっている。

ここまではハードの話だが、次にソフトの話をしたい。2016年4月1日、障害者差別解消法が施行された。この法律は障害者基本法の基本理念に沿って、障がい理由とする差別を解消するための措置について定めた法律で、障がいのある人に対する不当な差別的取扱いを禁止し、行政機関に対して合理的配慮の提供を義務付けるもので、この合理的配慮が今までと大きく変わったところだろう。

4. 合理的配慮

今までは今でもたぶん多くのところがそうだが一空港にいても、電車でも、それぞれの職場の皆さんは障がい者の対応マニュアルを持っている。しかし、マニュアルということは、すべての障がい者に同じような対処の仕方をすることになる。障害者差別解消法にある合理的配慮をよく調べていくと、「障害のある人ご本人の心身の特徴や、目的や場面、その人を取り巻く環境によって、必要になる合理的配慮の内容や程度は異なります。また、配慮を行う行政機関や事業者の側にも人的・技術的・金銭的資源の限界があるため、過度な負担でない実現可能な配慮を検討していく必要があります。」とある。これはどうか。結局、障がいの種別、障がいの程度・重さなどがそれぞれ違うので、本人からも確認しないと個別な対応はできないということである。マニュアルだけで、一通りのように扱うことはできないということである。

5. インフラのバリアフリーについて

次に、私の日常生活の中のいろいろな出来事をハード面とソフト面に分けて説明したい。ハード面というのは、交通機関や公共の建物、設備である。ソフト面というのは、人、考え方、固定概念である。

日本はハード面においては世界の中でもおそらくトップの国だろう。障がい者のトイレ

には、場合によっては、入りきらないほどの設備が中にある。逆に、そのために、本当に使いたい部分が離れたところにあるなどということも多々ある。せっかくのスペースがあるのに狭くて入りきれない、とか、中が広いのに入口が狭くて入れないといった話はたくさんある。私は現在、電車とバスを乗り継いで出勤している。これは 40 年前には考えられないことである。たった 40 年前だが、40 年前はどうだったかという、私が何とかリハビリをして、電車を使って通ってこい、そうでなければ雇わない、というのが一般的だった。

次に、ソフト面の話である。私は小さいときから障がいを持っているので、私はこれが普通なので、人目も気にしないし、細い脚もさらけ出して、平気で短パンを穿いて街中に出る。しかし、やはり街中に出ると、いろいろな人に出会う。子供は興味があるので、「あの人、車いすに乗っている」と言う。でもこれは当たり前なことだと思う。その後の親の処置が残念で、どうしても親が子供の言っていることをすぐ遮り、言うてはいけないことだとなんとか制止しようとする。皆さん、どう思うだろうか。私にとっては本当にいいチャンスだったと思うのである。先ほどの鈴木氏も話したように、「あの方は歩けないから車いすに乗っている」。たったそれだけのことなのである。もっと簡単に言うと、こういうことである。私は老眼なので、細かい字を読むときはメガネをかけているが、私が車いすに乗っているのは目が見えない人が眼鏡をかけるのと同じなのである。私は歩けないから車いすを使って、足の代わりにしている。それだけなのだが、なかなか理解されない。

ハード面は、日本は世界の中でもトップだが、ソフト面は実はまだまだである。残念なことに、欧米に比べたら遅れている部分が多く見える。どういうことかと言うと、今、どんどんハード面の整備をしているので、重い障がい者でも電車やバスを利用できる人を最近をよく見かけるようになった。以前は私がホームにいと、仕事中にほかの会社に行くにしても必ず声を掛けられていた。一人でホームにいと、今はそうでないが少し前までは必ず駅員さんが来て「付き添いはどこですか」とか、ホームから電車の段差で「上がりますか」と聞かれる。それが毎日となると、私にとってはだんだん鬱陶しくなる。駅員さんが来そうだなと思ったら、居眠りをする。そうしたらどうなるかという、たたき起こされる。「一人で大丈夫ですか」「付き添いがいないですが、どうですか」と、眠ったふりをしても起こされる。障がいの重さによって 1 cm、2 cm でも乗り越えられない人もいるが、私は普段、必要に応じて、だいたい 15 cm から 20 cm ぐらいまでは乗り越えられる。電車とホームの差はわずかに数センチなので「乗り越えられますよ」と言うのだが、駅員さんはだいたい聞く耳を持たない。そして、ホームと電車の間にかける簡易式のスロープを持って、私が大丈夫と言っても、近くに立って、私が電車に乗って去っていくまで見届ける。

まだ丸の内線の新宿駅にエレベーターが東口しかなかった頃の話だが、私はその日はた

また丸の内線に乗らなければならなかった。新宿西口で降りたときに、目の前に階段が20段ぐらいあったので、インターホンで駅員さんと呼んだ。なぜか来たのは4人の駅員さんだった。そのなかで、肩書が助役の駅員さんが私に「東口にエレベーターがあるので、そちらにご案内します」と言ってきた。私は西口に降りたいからこの階段を上げてくれればそれで済むことなのである。でもたぶんその助役はいつも車いすの人が来たら、エレベーターがある東口のほうに案内していたのだろう。今までは皆さん言えなくて、その駅員さんに従って、西口に降りたくても常に東口で降りていったのだと思うが、私みたいに「西口で降りたいから階段を上げろ」という人がたぶんいなかったのだろう。私はその助役さんに「私は西口に降りたいのです。この階段を上ればすぐ近くなので。東口で降りると遠回りして、たぶん15分ぐらいかけて西口まで行かなければならない。」ということを手助けに話したら、助役はハッとして黙っていた。数秒間黙っていたが、私が思うには、たぶん今までそういう人はいなかったのだろう。「こいつの言うことももっともだな。ここを上げればそれで済むこと。東口に案内すれば、そのあと彼は15分から20分ぐらい漕いで西口まで行かなければならない。」と考えたのか、たまたま来た駅員が4人だったので、そのまま階段を上げていただいた。

だからときどき思うのは、我々障がい者のほうも言わないと、皆さんにわからない。しかし言うには、パワーが必要なのである。その後言われることに対しても何か言わないといけないので、元気なときは、私もいろいろとすることができる。

駅のホームにはブラインド用の点字ブロックと、黄色い線がある。私も人を避けたりするとき、よく黄色い線をはみ出して、線路のほうにちょっと出たりする。線路のほうに出ると、必ず駅員さんに「危ないですから、黄色い線の内側に入ってください」と言われる。でも、私が今までホームで見えていて、大の男がああ黄色い線をはみ出して、駅員さんが注意したことは、一度も聞いたことがない。言われるのは私だけなのである。

あと、タクシーに乗りたいために手を挙げて、ほとんど空車のまま、だいたい何台か通り過ぎた後、やっと乗れるという感じである。それも現状である。

これは挨拶ということもあるが、夏に暑いときは「暑いですね」、冬は「寒いですね」と言うように、雨が降るときも「大変ですね」と言われる。すべて「大変」と言われるのである。でも本当に大変だったら、私は会社に行くこともないし、毎日家にいれば大変ではないのである。私にとっては全然大変ではないから、今1時間10分かけて電車とバスを使って通勤している。ときどき「雨のときは大変なのですか、どうしていますか」「カッパでも着ているのですかね」と聞かれる。一般の人で、なかなかカッパを着て会社に行く人はいない。なぜかと言うと、蒸れて暑かったりする。傘が一番自由である。だから、よく私も「カッパを着ているのですか」と聞かれるが、「いや、僕も傘を差します」と答える。

そうすると、車いすを漕いでいて両手がふさがっているのに、どうやって傘を差すのかと不思議に思われる。そうすると必ず「車いすにどこか差すところがあるのですか」と聞かれる。そういう車いすを使う人もいるが、私は車いすをできるだけコンパクトで、軽くした状態にしておきたいので、余計なものは一切付けていない。手は2本しかないので、「片手で傘を差すのですよ」と答える。「片手で差して、片手で車いすを漕いだら、まっすぐ行くのですか」とさらに不思議に思われる。練習すれば、ある程度はまっすぐ行く。でもずっとまっすぐは行かないので、そのときはどうするかというと、手を替える。今まで傘を差していた手で今度は車いすを漕いで、車いすを漕いでいた手で傘を差す。そう話すと、「傘を差しているところを見たいので」と、最後に見届けた人もいる。

実は本当に私が困っているものが一つだけある。大雪のときである。これはもうどうしようもないのである。雪が積もっていくと、砂のようなかたちになるので、のめり込んで車いすが動かない。これが翌日になって、氷が固まっていくと、今度は勝手に低い方向に車いすが滑って行ってしまふ。これもコントロールができない。私が唯一車いすに乗って困っているのが、大雪である。東京は幸い年1回か2回しか大雪が降らないので何とか大丈夫だが、冬の間ずっと雪が降っていたら、とても外出はできない。

6. 見た目 — メラビアンの法則

見た目というのが非常に大事なこととしてある。鈴木氏は、義足を使って普通通りに歩いているが、私は車いすに乗っているのだから、さらに見た目で判断されてしまう。

アメリカのUCLAの心理学者のアルバート・メラビアンが1971年に提唱した「メラビアンの法則」という概念がある。「メラビアンの法則」によると初対面の人を認識する割合は「見た目、表情、しぐさ、視線」でだいたい55%が決まってしまう。その人の「声の質、話す速さ、声の大きさ、口調」の聴覚情報がだいたい38%である。知覚と聴覚の情報を合わせると、93%は見た目で判断しており、だいたい初めて会った人の第一印象が3秒から5秒で決まってしまうのである。だから私はよく見た目から「かわいそう、何もできない、大変だなあ」と考えられてしまう。この見た目での判断を何とかできないかと思っているが、このメラビアンの法則の以後の研究でも、93%までほどではないが、やはり高いパーセンテージで皆さんは見た目で固定概念を決めてしまうと考えられている。

7. 必要な配慮

どういう配慮が一般的に障がいを持っている人に配慮が必要なのか。これも主に、私の普段の生活の中から、ハード面とソフト面を分けて説明したい。

ハード面については、とにかく段差である。年配の人もそうだが、やはり段差のあると

ころはきつい。段差はできるだけなくしたほうがベターである。どうしても段差のある部分についてはスロープにしていきたい。そのスロープにも、ときどき急なスロープでとても上がれそうにないスロープがたくさんあるのだが、車いすにとっては緩やかなスロープがあればと思う。

そしてトイレは、車椅子の入るスペースがあれば十分である。欧米のトイレは、日本よりサイズ的にとても大きい。入口が大きいので、欧米では私のような車いすでも普通のトイレに入ることができる。日本のトイレは、ドアの幅をもう 10 cmか 15 cm広げていただければ電動の車いすは難しいが多くの車いすはそのまま普通のトイレを利用できる。そして皆さんの働く事務所については、車いすの動線が確保できれば一番いいのだが、全体が難しければ、その車いすの人が動く周りだけ動きやすくすれば、それで十分なのである。

障がいには個人差もあるので一概には言えない部分もあるが、ニーズのギャップができるのは、やはりコミュニケーションが足りないからでしかない。実際は、利用する人に最終的に聞くのが一番である。

先ほども話したように、固定概念で、どうしても車いすを見たら、車いすだから、問題なくできるものについても「大変ですね」と言われてしまう。私としては足だけは障がいがあるから車いすを使っているが、それだけということである。

また欧米との違いとして、坂で車いすを見かけたときに、日本の場合は多くの人が、「手を貸したいけど貸していいのかどうか、貸さないほうがいいのかな」などと考えているうちに通り過ぎてしまう。いきなり後ろから車いすを押す人もいるが、実は、これが一番危ない。通常の手押しは、少し上に角度を付けてあるので、いきなり押すと、場合によっては車いすがそのままひっくり返ってしまう。最近少しずつ増えてきたのは、「押してあげましょうか」と声を掛けてから押すことである。欧米ではどうかと言うと、基本的には何もしてくれない。何もしてくれないのだが、実はひそかに期待をしている。本当に困っている感じにしていたら聞いてくる。こっちが「お願いします」と言ったら、待っていましたという感じで飛んでくる。これが欧米の一般的なかたちである。

空港に私がチェックインするときの話だが、いつも「空港の車いすに乗り換えてください」と言われる。これは一般的な空港のマニュアルである。でも、私の車いすは、実はタイヤを外すと飛行機の座席まで行けるようになっている。こういう車いすが少しずつ今、増えている。しかし、そういう説明をしても、「マニュアルはそうなっている、規則上はそうなっている」からということで、どうしてもチェックインのときに「空港の車いすに乗ってほしい」と言われる。この対応はだいたい、どの空港でも、新入社員の若い人が多い。そうすると、もうそれ以上埒が明かないので、だいたい別の人に替わってもらい、場合によっては、その人の上司に出してもらおう。そうするとだいたいわかっていただけるので、基

本的にはあとは座席のほうまで、ちょっとヘルプだけしていただければ、そのままチェックインができる。時々そういうふう聞き入れてくれても、実際は空港の車いすを準備することがある。「お客様の車いすは本当に通れますか」と聞かれ、「いや、たいがい 60 cm あれば通れます」と答えて、実際に通路の幅はだいたい 70 cm 以上あるので楽々と通れるのだが、それでもなかなか信じてもらえない。だから空港の車いすを用意されて、実際に飛行機のそばまで車いすを押されていく。車いすを乗り移るときも、実は非常に大きなリスクがある。車いすを乗り換えるときに、私も実際落とされたこともある。自分の車いすでそのまま座席へ行ける場合は、それが一番、本当は便利なのである。それ自体、リスクも少ないのに、なかなかわかってもらえない。

最近と同じ路線を使うので、その路線の担当者はだんだん私のやり方が一番楽であるとわかってきてきている。なぜかと言うと、もしチェックインの際に車いすを乗り換えた場合、職員が一人私について、私を押すことになる。私が搭乗する座席に座るまでの間、その人が私の付き添いをしてずっと押しっぱなしでいなければいけない。チェックインのときに私の車いすでそのまま行ければ、最後ゲートのところで、タイヤをちょっと外すのを手伝っていただければいいだけなので、そっちのほう全然合理的で時間もかからず、安全である。これも、わかってもらえるまで、何回も飛行機に乗らないと理解されないのである。

私は 2003 年から 2015 年 3 月まで、大分県別府市に住んでいた。2003 年に別府にいたときには、大分県にはエレベーターを設置している駅は一つもなかった。私がいつも使う駅は別府駅だったのだが、私が別府駅にいて、そのときは駅員さんが 4 人でホームに上げてくれたが、そのとき、私は駅員さんに「別府駅も、多くの観光客も来るので、それこそ障がいを持っている人は多いから、是非エレベーターを設置してください」と話した。そのときには、駅員さんは他人事のように、「実は 5 千人以上の乗降客の駅でなければなかなか設置は難しいのですよ」と凄く悲しい言い方でそれも他人事のように言ってくれたので、次の週、私は 5 人の車いすの人を連れて、その駅に行った。5 人の車いすをホームまで 4 人が 5 回上げた。その後、私は駅員さんに「是非エレベーターを設置してください」と言い、1 年後にはエレベーターが設置された。

同じようなことが、ほかの駅でもあった。その駅は片方しか出口がなく、出口がないほうで電車を降りたら、橋を渡って反対側に行って出る必要があるという構造だった。私はその駅で降りるために、一旦、乗り過ごして三つぐらい先の駅で反対側の電車に乗ってから戻ってきて、やっと橋を渡らずに降りていた。そのとき、駅員さんから「あなたは通り過ぎて三つ先の駅まで行って戻ってきたのだから、三つ先の駅まで料金を払え」と言われた。もし私が直接そこで降りたらどうなるかという、その駅は駅員が 1 人しかいない駅

なので、私を運ぶのに3、4人を呼ばないといけない。別府と大分はだいたい電車で15分間かかる。直接降りる駅で降りることになれば、大分から駅員さんを3、4人呼んでこないといけない。私はそうしたくないためにわざと乗り過ごして、反対側から戻ったら、駅員さんから「そこまでの電車賃を払ってください」と言われたのである。その時には、翌日には電話がかかってきて「お返しします」と謝ってくれた。大分でも同じような感じでいろいろなことが日々の生活にはあった。大分県では大分駅が一番大きいのだが、そこにもまだエレベーターがなかった。幸いそこはそうこうしているうちに、駅舎を新しくすることになり、今は立派なエレベーターが付いている。今でもたぶん大分は、三つの駅しかエレベーターが付いていない。

しかし、こうしたことを言うということは、大きな労力が要る。言った後、どういう反応があるかを考えると、元気でないとなかなか言えない。

最後に、これも鈴木氏と非常に同じようなところがある話である。一つ目は、バリアフリーがどんどん進めば、障がいを持った人がどんどん一般の社会に出ていき、同じような生活の場面で、皆さんと一緒になる。そして一般の企業の中でも、一般の人のように働くことができれば、また、一般の人が障がい者と多くの接点を持てば、総合的な理解が深まるだろう。今、バリアフリーがどんどん進んできて、障がいを持った人がどんどん街の中に出ていっている。今までは、接する機会がほとんどなく、障がい者の制度は、同じようなコロニーの中、温室の中にといい制度だったと思う。今は、障害を持っていても1人で生活できるようになったので、社会に出ている。障がい者の人がどんどん社会に出ていくので、一般の人が障がい者との接点が増えれば、障がいに対する理解も深まるだろう。

もう一つは、残念なことなのだが、いまだに日本にいるときは自分が障がいを持っていることをいつも認識させられるが、欧米にいるときは、自分が障がいを持っていることすら忘れてしまうほどである。日本にも、早くその日が来ることを願っている。

質疑応答

質問：講演の中でたくさんヒントを頂いているが、先ほど須藤氏からのお話にもあった合理的配慮は、障害者差別解消法ができた後、それぞれの企業などで取り組みがなされているところ、どうしても物理的な配慮に偏りがちである。普段、仕事場、あるいは競技をされている立場から、ソフト面で、「こういったことをまずきっかけとして始めてはどうか」というようなご提案、あるいは、「普段こういうことが身近にある」というお話をいただければと思う。私もから見る合理的配慮と、障がい者の皆様がお感じになる合理的配慮には、ギャップがあると伺っているので、もし何か示唆するお話があれば伺いたい。

須藤氏：障がいの程度や種類によっても全然違ってくる。例えば会社に新しく新入社員が入ったといったパターンだと、できればその人のベストの合理的配慮をしていただくのがよい。例えば簡単に言えば、手の障がいを持っている人でもどの程度手が上がるかによって全然違うのである。そうすると、その人にとって便利なところ、その人が使えるところが、一番便利なところなのである。

こういう話がある。日本で障がい者誰もが使いやすいヨットを作ろうとしたことがあり、色々な障がい者のために色々なチェックをした。目の見えない人、筋力が弱い人、強い人、色々な障がい者のために考えて作ったヨットなのだが、出来上がったヨットは、誰にとっても使いにくいヨットになってしまった。

ではどうすればよいか。実際、そこで働く人の意見を聞いて、その人にとってどの部分がどのような状態であるのが一番いいのかを聞いて、できるだけそのニーズに近づいた状態が一番よい。その人のために対応した結果、他の人があまりにも使いにくいと意味がないが、その人が日々生活しないとイケないのであれば、できるだけその人のニーズに近づけるようにするのがベストだと思う。

質問：パラリンピックの選手は、比較的選手生命が長いようである。オリンピックの選手と比べるとずいぶん長いと思う。競技を長く続け、しかも記録を伸ばしていける秘訣のようなものがあれば教えてほしい。

鈴木氏：選手生命が長く感じるのは、おそらくスタートが遅いからだと思う。私も、18歳で足を失い、そこからスタートした。私の場合はスポーツをやっていたので、義足もすぐに慣れて、1年後にはパラリンピックに行ったが、そのようなケースはあまりない。ほとんどの人が4～5年のリハビリを経て、そこから競技を始める。それも全くやったことの

ない、今までやっていたのとは違う競技をやる人が多いので、スタートに時間がかかる。5年から10年ぐらいは準備期間があって、そこから始めると、どうしても40歳からパラリンピックに行くといったこともある。

他に道具のこともある。義足も道具なので、始めは使い方がうまくないのだが、だんだんうまくなっていく。特に車いすの場合は、義足を着けておらず、自転車のように廻すので、比較的足に負荷がかからない。義足は足に負荷がかかるので、おそらく50歳までパラリンピックに行っている選手はいないと思う。車いすは、50歳、60歳でもパラリンピックに行っているケースがある。セーリング等の種目はより負荷がかかりにくいので、意外にベテランの人のほうが多い傾向にある。より技術系の高い種目ほど、ベテランの選手が活躍しているケースがあると思う。

須藤氏：セーリングの場合は、長年の海の経験が必要である。私自身も、セーリングを始めたのは1992年である。それも、無料でヨットの講習をしていただけというチャンスがあったから始めたのである。一般の人にとっては、ヨットというのは別世界の感じがするかもしれないが、私も最初はそういう感じだった。35歳から競技を始めたわけである。幸い、ヨットの場合は経験が必要であり、海に出た数だけ経験がないとなかなか対処ができなかったりする。高齢まではいかなくても、年齢が高い人も多く、若い人のほうが、経験が少ないので不利な部分がある。

質問：お二人の話の中に、「ハード」と「ソフト」というお話があった。なぜ日本はハードに力を入れてきてしまったのかということに、お気づきの点があったら教えていただきたい。当行でも障がい者雇用をどんどん進めていこうという話はしているが、やはり「ハードを整えよう」というところに向いてしまい、そして「お金もかかるね」という話になってしまうことが多い。お話しから、ハードを整えておくのもいいのだが、ソフトの部分が大切なのだなと感じた。

鈴木氏：おそらく日本の場合、ハードを整えれば、バリアフリーが実現できると思っていたのではないか。ハードを作ることで、障がい者が暮らしやすくなるのだが、同時に、障がい者との交流という時間は設けなかった。なので、日本全国にいろんなハードが整っても、結局はバリアフリーになった気になっているだけで、実際は交流ができていない。海外は、おそらくお金もかかるので、ハードを整えるよりも、交流をしていると思う。例えば僕らがブラジルに行くとビーチに座っていると、普通に声を掛けてくれる。それはおそらく向こうが興味を持っているとしか考えられない。気を遣っていたら、なかなか声を

掛けてこないと思うのだが、同様のことはブラジル以外の国でも起きている。おそらく教育でやっている国もある。シンガポールに旅行に行ったときに、ハーフパンツで電車に乗った瞬間に、優先席の人々が全員立ったのである。全員立って、「どうぞ」という感じで高齢者も席を立った。これは日本では絶対に起きない。これはおそらく子供のころからの教育によるものだと思う。このソフト面を日本がやってこなかっただけだと思う。その部分が弱いのは、おそらくハードを整えていけばなんとかなるだろうという予想が外れた結果だと思う。今後は東京オリ・パラもある。そういう意味では交流がこれから増えていく。少し時期としては遅いのだが、ハードは十分あるので、なるべく早く交流を深めていくことで、ソフトを高めていけば十分間に合う。また相互理解が実現できると思う。今後は「交流」である。社員の人の中に障がいを持たれた人や病気を持たれた人もいると思うので、そういう人とたくさん交流していただく。皆さん自身が勉強することはほとんどないと思うが、一緒にいればわかっていただけの部分もある。一緒に交流すれば「ああ、これができる、これができない」「こういうのに時間がかかるな」ということが、一緒に時間を共有することでわかっていただけだと思う。今後はそのようにしていただければよいのではないかと思う。

須藤氏：簡単に言えば、日本にはハードにつき込む予算があるからである。日本はすごく立派なトイレがたくさんある。いろんな器具がいっぱい入っている。でもときどき変な器具がある。例えば鏡である。鏡は、我々が見えない角度に設置されていたりするが、我々が見える角度だと一般の人が利用するときには使いにくい。海外では、例えばフランクフルトのトイレで私が見たのは、鏡の横にロープとハンドルがあって、それを回すと、その鏡の角度が動くのである。たったそれだけのことで、一般の人が使いやすくなるし、我々障がい者が見えない場合は、ハンドルを回せば、鏡が斜めになり、我々が見える。そういった小さな工夫を日本は意外としない。だから、一般の人が見えるような状態か、我々が見える状態かのどちらかになっている。両方から見えるのは、日本にいて私は見たことがない。たまたま去年、フランクフルトでそういう鏡が動く、それもただロープを使って鏡の角度を変えられるトイレがあった。要するに、お金はかけられないけれども、うまく使うためにはどうしたらいいか、ということである。

なぜソフトで日本が遅れているのか。欧米でもアメリカとイギリスは飛び抜けて理解がある。なぜだろうか。アメリカもイギリスも、いつも戦争している。戦争すると、傷痍軍人がたくさん出る。傷痍軍人が社会に戻っていくためには、国を挙げて教育、啓蒙活動をしていく必要がある。その違いがあるのではないかと思っている。